

平成 18 年度事業報告書

自 平成 18 年 4 月 1 日

至 平成 19 年 3 月 31 日



はじめに

平成 18 年度は、「21 世紀第 2 次家の光事業中期計画」(平成 16 年度～18 年度)の最終年度として、第 23 回 J A 全国大会決議案の「協同活動の強化による組織基盤の拡充と地域の活性化」の着実な実践のために、J A 教育文化活動活性化支援を柱とする家の光事業の総合的な機能発揮に努め、この中期計画で策定した重点実施項目や普及目標の達成をめざし、前年度に引き続き「元気キャンペーン」を家の光協会の総力を挙げて展開した。

特に J A 役職員に対する J A 教育文化活動の理解促進をはかり、J A における体制づくりを支援するために、「家の光文化賞 J A トップフォーラム」「J A 教育文化活動実践研究集会」の開催や、広域 J A 時代に対応した「教育文化・家の光プランナー」の設置促進をすすめた。

企画・制作では、農業・農村・J A への理解を深め、心豊かな暮らしと生き方を広める提案をしていくために、『家の光』『地上』『ちゃぐりん』『やさい畑』『家の光図書』のほか、19 年 3 月には新雑誌『花ぐらし』を創刊し、それぞれの媒体特性を活かした企画内容の充実に努めた。

普及運動では、「『家の光』創刊 80 周年記念 / 長期愛読者拡大運動」に引き続き、「世代をつなぐネットワーク『家の光』長期愛読者拡大運動」を展開し、“世代をつないで J A ファンをつくる協同のネットワークの構築”に向けて長期愛読者の拡大に取り組んだ。

J A がすすめる次世代対策活動を支援するために、「第 2 回アグリスクール全国サミット」を開催したほか、子どもたちの農業体験活動に関する情報の共有化および全国のネットワークづくりに向け、J A 全中が事業実施主体となっている「全国子どもファーム・ネット推進協議会」の事務局として、関係機関との連絡・調整をすすめた。

公益性のより高い文化事業として特に読書活動の促進に取り組み、「家の光読書フェスタ&読書ボランティア養成講座」や「家の光読書エッセイ」の募集、「全国農村読書調査」などを実施した。

1. JA教育文化活動の促進・強化

JA役員に対し、JA教育文化活動の今日的意義と役割についての認識を深め、家の光事業への理解・促進をはかるために、以下の活動を実施した。

(1) 会議・研究集会・セミナー等の開催状況

<全国段階>

家の光文化賞JAトップフォーラム 2006

「地域とJA～文化と協同の力で広める10年後も元気なJAづくり～」をテーマとし、家の光文化賞農協懇話会と共催で8月3～4日に東京で開催。119JA合計247名が参加した。

<ブロック段階>

JA教育文化活動実践研究集会

「JAへの結集力強化に果たす教育文化活動と家の光事業の役割～組合員次世代、地域住民、女性の参加・参画をすすめるために～」をテーマとして、5～7月に全国3地区で開催。参加者は合計130JA、223名であった。

JA生活文化活動担当者研究集会

「魅力あるJA生活文化活動のすすめ～『家の光』からはじめよう 豊かな暮らし～」をテーマとし、6～7月に全国3地区で開催。参加者は合計138JA407名であった。

<都道府県段階>

JAの組合長や常勤役員を対象にした「トップセミナー」は12府県で開催され、都道府県におけるJA教育文化活動の活性化と普及活用運動への理解促進をはかった。「家の光事業推進協議会」は、新たに高知県、鹿児島県で発足し、北海道、三重県、京都府の5道府県となり、家の光事業の積極的展開をはかった。

<JA段階>

家の光事業の理解促進を通じて普及活用運動の徹底をはかるために、「家の光事業研究会」「教育文化セミナー」などが、84JA延べ113会場で開催された。

また、家の光事業の理解促進をはかるために、JA教育文化活動の重要

性や、J A教育文化活動の実践が盛り込まれた第24回J A全国大会決議と家の光事業の関係を明確にした資料「J A事業と家の光」を作成し、家の光事業研究会等で積極的に活用された。

(2) 教育文化・家の光プランナー

「教育文化・家の光プランナー」は、18年度末現在で新規登録34名、引継登録53名で、221J Aで242名が登録されている。同専修講座は坂野百合勝氏をコーディネーターに、「教育文化活動をいかに仕掛けるか～事業計画への位置づけから企画立案までの具体的方策～」をテーマに、10月31日～11月1日・浅草ビューホテルで開催、47名が参加し、J Aの事業計画への教育文化活動の位置づけ方や推進体制の整備、具体的な企画立案について、先進事例報告や分散会をふまえて研究をすすめた。

なお、専修講座の一環として、5～7月に3地区で開催されたJ A教育文化活動実践研究集会への参加も支援し、3地区合計で59名の参加があった。

(3) 家の光文化賞

<第57回「家の光文化賞」、平成18年度「家の光文化賞促進賞」の募集>

平成18年10月25日の第1回審査委員会、現地調査、12月7日の第2回審査委員会を経て、家の光文化賞1J A、家の光文化賞促進賞に7J Aが12月22日の本会理事会に推薦され決定した。顕彰については、平成19年2月9日に開催された第49回全国家の光大会席上で表彰を行った。

<家の光文化賞>

富山県 高岡市農業協同組合

<家の光文化賞促進賞>

秋田県 秋田おばこ農業協同組合

広島県 福山市農業協同組合

山口県 あぶらんど萩農業協同組合

福岡県 福岡市農業協同組合

熊本県 熊本宇城農業協同組合

熊本県 あしきた農業協同組合

宮崎県 はまゆう農業協同組合

<第2回「懸賞論文」の募集>

家の光文化賞農協懇話会では、文化と協同の力で元気なJ Aをめざす活動の一環として、J Aグループ役職員を対象とした「懸賞論文」を募集した。募集テーマは「活力あるJ Aづくりのための教育文化活動の展開 - 組合員の

参加意識の醸成のために - 」とし、入選作品は平成 19 年 6 月に発表の予定である。

2. 企画制作

『家の光』

JA と組合員・地域住民との結びつきを強めるコミュニケーションツールとして、また「協同組合の家庭雑誌」としての役割をいっそう発揮するために、「食と農」「暮らし」「協同」「家族」を企画の柱として、いのちと暮らしを守る視点と JA グループの考え方をたいせつに企画制作を進めるとともに、JA 家の光編集企画・活用研究会や JA モニター、公募モニターなどからの意見を編集に反映させた。

また、創刊 80 周年を契機とした誌面刷新の方向を継続し、読者ならびに JA 組織の付託にさらに応えていくために「生活力アップ！～自給で家族みんなが豊かな暮らし」を編集の基本コンセプトにおき、協同する喜びや感動と共感にあふれる企画内容の充実・改善に努めた。

「食と農」では、共生と生産（営農）の視点をたいせつに、食と農の教育や地産地消の取り組み、都市と農山漁村の共生・交流を進めるための情報として、食料自給率について考える企画や、ファーマーズマーケットでの商品販売に役立つ企画、牛乳やミカンの消費低迷をサポートするための企画、食の安全・安心の観点から堆肥作りの企画などを掲載した。また、7 つの地区版では、地産地消と食の安全・安心の観点を重視し地域密着の情報を提供した。

「暮らし」では、手づくりの視点をたいせつに、地に足のついたほんものの暮らし（スローライフ）をめざす企画や、自給の今日的な意味を踏まえての野菜の保存法など、足もとの地域資源を再発見するための企画、農作業事故から身を守るための企画、防犯対策のための企画などを掲載した。また、読者ニーズを踏まえ、家庭介護や子育て面での心の悩みに答える企画を連載した。

「協同」では、第 24 回 JA 全国大会を前に、組合員の結集力を高めている先進 JA レポートや、家の光文化賞受賞組合レポートを掲載。また、JA 女性組織活性化のための JA 女性組織学習月間企画や、JA 女性部フレッシュミズの交流の企画を掲載した。JA と地域の視点をたいせつにした協同する仲間づくりや、たがいに支えあう心温かな地域づくりのための情報の提供に努めた。

「家族」では、心の視点をたいせつに、家族同士がきずなを深めあい、たがいに支えあう温かな家庭を築くための情報として、自分らしい時間の使い方や、

お年寄りに昔遊びを教わる企画、話し上手・聞き上手になるための企画、夫婦円満の秘訣を考える企画、介護や子育てを支援する企画などを掲載した。また、子どもの情操教育に役立つ家の光童話賞や感動と共感を呼ぶ読者体験手記を募集、入選作を順次掲載した。

『地上』

日本の農と食を担う人々の雑誌として、主に農業生産の「担い手層」に向けた情報を提供してきた。とくに農政面では、戦後農政の大転換といわれる「新しい経営安定対策」の要綱が決定するなど、政策が大きく動いたことから、制度解説と農業者の対応に重点を置いた記事づくりを行った。7月号「集落営農組織づくり最前線」、10月号「新しい経営安定対策で、うちの経営はどうなる？」、1月号「集落営農組織、うちの地域はこう進む」、3月号「新需給調整システム Q & A どう作る今年の米」で、ポイントを押さえながらていねいに解説した。また11月号では経営安定対策に関わる制度を網羅した「必携 担い手ハンドブック」(綴じ込み付録)を作製し、好評を得た。さらに、日豪EPA交渉をめぐる動きが急展開したことから、2月号「緊急特集 日本には譲れないことがある」、3月号「オレたちの声を聞け! もう黙ってられない」で、JAグループ・農業者の主張を掲載した。

5月には、農業者にとって無関心ではいられない「農薬のポジティブリスト制度」が施行。6月号「いよいよ施行 農薬のポジティブリスト制度」、9月号「農薬ポジティブリスト制度その後」で、制度の解説と農業現場の対応策についての情報を提供した。

第24回JA全国大会が開催されることから、JAの組織や事業について組合員の関心を高めてもらう企画にも力を入れた。5月号「JA総代会資料の読み方」、9月号「JA全国大会に向けて オレたちの組織がめざす道」、11月号「JA青年組織パワーアップ企画 オレたちのJAだから」を掲載した。

現在の農業は、消費者ニーズや流通動向を無視しては成り立たないともいえる。農産物の流通・消費情報を提供する連載企画「Agri - Biz」のほか、特集記事として5月号「見つけた! 思わぬヒット商品」、8月号「消費者ニーズをつくれ!」、4月号「脱・他人任せの農産物販売 売り込め!」などを掲載。農業経営や地域振興につながるヒントを提供した。

『ちゃぐりん』

「食育基本法」が制定されて一年が経過するなか、「食と農の教育」に強い視点をおいて、JA活動や学校の授業に役立つさまざまな企画を掲載した。写真、イラストを多用し、栽培から調理を連動させて構成した「作って食べようやさいくん」、学校給食の実践事例をまんが化した「どろんこ7」、食べ物をあらゆる角度から調べる提案をした「チャレンジ！食べ物教室」などの連載をはじめ、5月号の「朝ごはんつくったよ～！」「作ろう食と農のかべ新聞」、6月号の「食べ物クイズ わたしはだあれ？」「すごいぞミミズ！」、7月号の「パワフル納豆」、8月号の「砂糖の正体ってなあに？」「牛ふん大ヘーンシン」、9月号の「サトウキビで自動車が走る！」、10月号の「おいも・お米・おもちのおやつ」「朝ごはん条例でみんな元気！」、11月号の「ダイズクイズ30問」「生クリームからバターを作ろう」、12月号の「よく分かる！土の教室」「目利きになって買い物上手」、1月号の「全国お雑煮めぐり」、2月号の「ジェラートの向こう側」、3月号の「ブヒブヒ！ブタバタ大研究」「こんにゃくはイモからできる」、4月号の「春だ！潮干狩りへGO!!」など、食と農に重点をおいた特集企画を掲載した。

また、JAの理解促進を目的として、8月号の別冊付録「大好き！お米クッキング」、1月号の別冊付録「惣一じいちゃんの食と農かるた」、4月号の別冊付録「旬の野菜を探せ！カレンダー」を編集。食と農のすばらしさを紹介するとともに、子どもたちが楽しめるように工夫した。そのほかに、いのちの大切さを伝える読み物企画として、7月号「車いすのお父さん」、8月号「さよなら わたしの愛犬クロ」、1月号「今、動物たちが危ない！」、異世代交流や家族交流の促進企画として、9月号「夏の思い出をTシャツにしよう」「おじいちゃんおばあちゃんに挑戦！昔の遊び」、11月号「小学生から始める盆栽」、1月号「エコでおしゃれ！ラブ風呂敷」などを掲載した。

『やさい畑』

市民農園の利用者をはじめとする家庭菜園愛好者に、菜園生活を通じて「自然と暮らす豊かなライフステージ」を提案する雑誌として、「育てる（栽培技術）」「食べる（料理・加工）」「健康（安心・安全）」「自然と遊ぶ（ホビー）」の4テーマにもとづき編集した。また、菜園活動を通じて農業への理解を促進することも意図して取り組んだ。

季刊雑誌で書店販売が中心という点から、特集記事が売れ行きに影響する傾向にあり、夏号では「激辛トウガラシの愉悦」、秋号では「秋のカブ祭り」、冬

号では「読者の疑問に答えるQ & A」、春号では「はじめての菜園生活」の特集を組んだ。

『花ぐらし』

団塊の世代をターゲットに、園芸を通じて自然とふれあい、ひいては農業への理解を深めてもらいたいという願いを込めて平成19年3月16日に季刊雑誌として創刊した。

「花を咲かせる喜び」(栽培技術)「花を知る楽しみ」(花と文化)「花と暮らす幸せ」(花のあるライフスタイル)の3テーマにもとづき編集し、創刊号は「後藤みどりさんと始める 初めてのバラづくり」をはじめ、バラの特集を組んだ。

「家の光図書」

心豊かで健康的な生活に役立つ企画、地産地消や「食と農の教育」のたいせつさをアピールする企画、協同組合運動を活性化させる企画などに重点を置き、生活実用書、教養書、農業書、協同組合書の4つのジャンルで、「JAおよびJA組合員、一般読者のさまざまなニーズに応える新刊図書を59点刊行した。

生活実用書のうち、料理関係の書籍としては『点心名人の餃子指南』『カツ代レシピ』『村上祥子の電子レンジで野菜料理100』『お菓子づくり百科DVD付き』『アトピーにも安心100%米粉のパン&お菓子』『毎日の野菜おかず大百科』『有元葉子 うちのおかず12か月』『Q & Aですべて解決! 名人の梅干し・梅料理』など、園芸関係の書籍としては『季節を味わう野草摘み』『名人が教える 山菜の採り方・食べ方』『名人が教える きのこの採り方・食べ方』『これで失敗しない家庭菜園Q & A』『ミニ花壇や室内で楽しむ やさしい花づくり』など、健康関係の書籍としては『老いない体になれる その場7秒健康法』『体の中から生まれ変わる 龍村式暮らしの中の呼吸法』『旬を食べる 和食薬膳のすすめ』など、ロングセラーをめざした書籍を刊行し、発刊後、堅調な動きを見せている。

教養書では、『踊る「食の安全」農薬から見える日本の食卓』『食育菜園』『食育実践プログラム CD-ROM付き』『野菜を育てて学ぶ 食育実践BOOK』『ふるさと野菜礼賛 在来品種を守る』『写真集 昭和の農村』など、本会らしい食や農、地方からの情報発信をテーマにした書籍を刊行し、新聞、雑誌等のマスコミにも取り上げられた。

農業書では、『オーガニックなイタリア 農村見聞録』『地域と環境が蘇る 水田再生』『農と日本の再生計画』『よくわかる農産物加工ガイド』『この手があ

った！集落営農』などを、協同組合書では、『規制改革時代のＪＡ戦略 農協批判を越えて』『新協同活動の時代』『農業ビジネス列伝』を刊行した。

3. 普及運動

『家の光』

「家の光事業中期計画」の最終年次である平成 18 年度は、「世代をつなぐネットワーク『家の光』長期愛読者拡大運動」を展開し、年間増部目標 5 万部の確保をめざし運動に取り組んできた。

その結果、年度末 5 月号定期部数は 602,295 部(前年同月号対比 8,446 部減)となった。年度末 5 月号対比でＪＡごとにみると、増部は 157 部、減部は 651 部、差し引き 4,637 部の減となった。県下一斉運動をはじめ広域ＪＡにおいてＪＡ役職員が一体となった取り組みの事例が増えてきたが、一方で、取り組みＪＡの減少や計画部数の未達、前納更新における減部も多く、前納更新ＪＡ、計画ＪＡに対する早期の働きかけと部数管理が大きな課題となっている。

目標については、秋田県、埼玉県、愛知県、大阪府、奈良県、島根県の 6 府県が達成した。5 月号では、10 府県が 17 年度末 5 月号を上回り、年間累計部数は、6 府県が前年度を上回った。

広域ＪＡにおいては、ＪＡ全体での大規模な長期愛読者拡大運動が取り組まれた。年度末 5 月号対比では、愛知県ＪＡ愛知西、ＪＡあいち豊田、ＪＡ尾張中央、秋田県ＪＡ秋田おばこ、愛知県ＪＡあいち中央、ＪＡなごや、ＪＡあいち尾東、ＪＡ愛知みなみ、秋田県ＪＡあきた北、愛知県愛知東、大阪府ＪＡ大阪南、埼玉県ＪＡいるま野、岡山県ＪＡ岡山、埼玉県ＪＡ埼玉ひびきので 400 部を超える普及成果をあげた。

(1) 前期普及活用運動

前期については、「世代をつなぐネットワーク『家の光』長期愛読者拡大運動」を展開し、継続増部目標 3 万部の確保のために全都道府県において前期 1,000 部以上の増部の実現を目標に取り組んできた。11 月号定期部数は、603,130 部。5 月号対比でＪＡごとにみると、増部は 255 部、減部は 15,786 部であり、運動取り組みＪＡ数・増部数ともほぼ前年並みであった。

運動の特徴点としては、奈良県が 7 月号前納更新で平成 12 年度から 6 年連続して高普及率を維持、埼玉県は 11 月号で「食と農を結ぶ豊かな地域社会をめざして」と題した県版を作成し県下一斉推進に取り組み、いずれも 18 年度事業計

画目標を達成した。広域ＪＡにおいては、秋田県ＪＡ秋田おばこ、愛知県ＪＡ愛知西、ＪＡ愛知みなみ、ＪＡ愛知東、広島県ＪＡ尾道市、佐賀県ＪＡ佐城などで大きな取り組みがあった。

(2) 「ライフプラン＆家計簿『家の光』12・1月号普及活用全国特別運動」の取り組みについて

12月号部数は863,372部と全国目標部数を5,372部上回ったが、1月号部数は683,594部(維持部数80,464部)と目標にはおよばなかった。12月号では、38道府県(前年度37都府県)で目標を達成したのに加え、1月号では、宮城県、秋田県、静岡県、愛知県、大阪府、奈良県、和歌山県、島根県の8府県(前年度6府県)で目標を達成した。

運動の特徴点としては、愛知県がＪＡあいち中央、ＪＡ尾張中央、ＪＡ愛知西などで12・1月号を基点とした大量継続増部を実現、また大阪府においては12月号で府下一斉推進を展開し、いずれも18年度事業計画目標を達成した。

(3) 後期普及活用運動

後期については、都道府県別に到達目標と具体的な普及方策を策定して年度末運動に取り組んできた。到達目標は、18年度事業計画目標の達成を基本としたが、目標と乖離しているばあいは、前年度末5月号部数の回復をめざし、年度末までに減部傾向から増部基調への転換をめざすことを基本とした。運動の特徴点としては、秋田県においてはＪＡ秋田おばこに続き、ＪＡあきた北で大量継続増部を実現し、18年度事業計画目標を達成した。愛知県では、『家の光』特別増部運動(3か年計画)を展開中で、後期もＪＡあいち豊田、ＪＡなごや、ＪＡあいち尾東などで大きな取り組みとなった。

『地上』

重点ＪＡにおいて総合推進による長期愛読者拡大をはかったほか、特集企画や付録と連動した普及活用運動に取り組み、特集企画の要点を紹介した「家の光メールマガジン」の配信や緊急企画等については「『地上』FAXニュース」をＪＡ・ＪＡ中央会へ送信するなど広報宣伝活動を強化してきた。

その結果、年度末5月号定期部数は26,264部(前年同月号対比273部増)となった。広域ＪＡにおける総合推進の取り組みやＪＡ青年組織の盟友皆読運動などの事例が増え、全体としては前年度累計部数を上回る都道府県は増えているものの、その成果をいかに継続購読に結びつけていくかが、今後の課題とな

っている。

5月号対比でJAごとにみると、増部は201JA1,881部、減部は345JA1,821部、差し引き60部の増となった。

目標については、北海道、岩手県、福島県、茨城県、東京都、富山県、滋賀県、奈良県、島根県、岡山県、熊本県の11都道県が達成した。5月号で前年同月号を上回ったのは27都道府県、年間累計部数で前年度を上回ったのは18都道県であった。

広域JAでは、奈良県JAならけん、長崎県JA長崎せいひ、福島県JAみちのく安達、熊本県JAあしきたが、前年同月号対比で50部以上の増部を達成した。

(1) JA青年組織盟友皆読運動について

11月号では、JA青年組織パワーアップ特別企画「おれたちのJAだから」にもとづきJA青(壮)年部盟友皆読運動を全国で展開するとともに、綴じ込み付録「必携 担い手ハンドブック」をJA・JA中央会における担い手対策のテキストとして活用するための普及活用運動を展開した。その結果、11月号定期部数は、34,775部(前月比9,737部増)、継続部数279部と前年度を1,925部上回る普及結果となった。

熊本県においては、7月号県版によるJA青年部盟友皆読運動(3,722部増)につづき、11月号においても増部成果をあげ、富山県、岩手県でも1,000部を超える大きな取り組みとなった。

『ちゃぐりん』

重点JAにおいて総合推進による長期愛読者拡大をはかったほか、8月号普及活用運動、第24回JA全国大会決議の実践のため、「JA食農教育プラン」の策定・実践を支援する4・5月号普及活用特別運動を展開してきた。また、全国の組合長あてに広報宣伝活動の一環として1月号を寄贈した。

その結果、年度末5月号定期部数は47,864部(前年比1,430部減)となった。「食と農の教育活動」への期待が大きくなるなか、「JA食農教育プラン」の策定・実践に『ちゃぐりん』の普及活用運動をどう連動させていくかが、喫緊の課題となっている。

5月号対比でJAごとにみると、増部は253JA2,828部、減部は355JA3,733部、差し引き905部の減となった。目標達成については、宮城県、福島県、埼玉県、東京都、奈良県、鳥取県、広島県、徳島県、高知県の9都県が確定した。

5月号で前年同月号を上回ったのは19都府県、年間累計部数で前年度を上回ったのも19都府県であった。

広域JAでは、宮城県JA栗っこ、奈良県JAならけん、熊本県JAあしきた、新潟県JA越後ながおか、福島県JAみちのく安達、鹿児島県JAグリーン鹿児島、栃木県JAうつのみや、愛知県JAみどり、福岡県JAふくおか八女、長野県JA上伊那が前年同月号対比で60部以上の増部を達成した。

別冊付録「大好き！お米クッキング～こんなにすごいお米の栄養」のついた8月号全国特別普及活用運動では、38都道府県で18年度事業計画目標を達成、定期部数は109,237部（前月比61,404部増）となった。とくに、県版を作成した埼玉県、熊本県で大きな取り組みがあった。

『やさい畑』『花ぐらし』

『やさい畑』は、2006年夏号から2007年春号の販売促進活動を展開した。特に2007年春号で創刊5周年記念特別企画号として販売活動をすすめた。実績部数は、夏号は52,373部（書店販売43,299部+JA普及・個人購読ほか9,074部）秋号は47,645部（書店販売38,341部+JA普及・個人購読ほか9,304部）冬号は53,033部（書店販売43,606部+JA普及・個人購読ほか9,427部）とほぼ前年並み。また春号については3月末現在で、書店販売分71,996部（委託期間中）で、JA普及・個人購読ほか8,637部とあわせると80,630部となり、昨年実績を上回る状況である。書店関係については、一定程度読者が定着してきたと思われる。また、JAにおける取り組みとして、ファーマーズマーケット等の生産者会員にJAが見本誌を案内し、読者を獲得するなどの実例があがっている。

『花ぐらし』は、3月16日に創刊し、春創刊号は、書店販売分114,128部（委託期間中）でJA普及・個人購読ほか1,271部とあわせて115,399部となっている。

「家の光図書」

新刊59点、重版56点を発刊し、販売部数752,674部（市販342,995部、JA組織409,679部）で、前年対比123,782部（市販48,645部増、JA組織172,427部減）の減部となった。

JA組織では、記念品図書として、神奈川県JAかながわ西湘（10,200部）新潟県JA新潟みらい（13,000部）大阪府JA大阪南（15,000部）兵庫県JA兵庫みらい（14,000部）福岡県JAにじ（12,000部）などで大口採用があった。実物回覧は、新規取り組みJAが増えているものの、送本数は減少傾向

にある。図書予約組合は、74口の減口（加入7口、中止81口）で、3月末時点で1,326口となっている。

市販では、6月末に発刊した『踊る「食の安全」農薬から見える日本の食卓』や、10月末発刊の『地域と環境が蘇る 水田再生』が新聞書評等で取り上げられ話題にのぼった。また、7月末に発刊した『カツ代レシピ みんなが選んだ88の味』を、全国の書店におよそ16,400部を新刊委託し、好評につき3,070部を再委託した。また、大型企画図書『お菓子づくり百科 DVD付き』（10月発刊）を25,141部、『毎日の野菜おかず大百科』（2月発刊）を26,230部書店に新刊配本した。また実用書企画フェアとして、「ウメ干し・ウメ料理セット」「村上祥子セット」「きのこセット」「チョコレートセット」などの販売促進を行った。

さらに、7月上旬に開催された「2006 東京国際ブックフェア」（東京・国際展示場）に出展し、販売促進および版元PRを行った。

4. 記事活用・文化活動

人・JA・地域の元気の輪、協同する仲間の輪を広めるために、三誌、図書を用いた記事活用・文化活動を積極的に展開するとともに、組合員・地域住民の心豊かな暮らしや幸せづくり、JA教育文化活動や女性組織の活性化をめざし活動をすすめた。

(1)「家の光大会」の開催

「JA家の光大会」は内容充実に向けて「JA家の光大会事例集」を作成し、開催促進に努め、227JA285会場で開催された。参集者には「記念品」、表彰者・体験発表者等には感謝状と記念品を贈呈した。都道府県家の光大会は、42会場で開催された。

JA・地区・都道府県における家の光大会の体験発表者は延べ人数835名、都道府県代表体験発表大会では59名が体験発表を行った。全国家の光大会は2,400名の参集者が集い、平成19年2月9日（金）に埼玉県（大宮ソニックシティ）で開催した。

なお、講師の斡旋利用件数は大会等の利用を含めて、367件あった。

(2)「JA家の光料理教室」「JA家の光クッキング・フェスタ」の開催

JA家の光料理教室事業は、「旬が生きてる わが家の食卓」をテーマに、農

林水産省ほか関連団体の後援を受けて取り組んだ。JA家の光料理教室は142JA1,163会場で開催し、参加者は30,947人。リーダー育成をめざす都道府県「JA家の光料理教室リーダー研修会」は、13中央会2単一JA・18会場で開催、「JA家の光クッキング・フェスタ」は38JA40会場で開催した。今年度からは伝承料理も一品加えて「地産地消」の定着、食と農の理解者を増やすことに努めた。

また、JA全国女性協との共催「ザ・地産地消 家の光料理コンテスト」は、164件の応募があり審査結果を『家の光』4月号に掲載した。

(3)『家の光』記事活用グループ

『家の光』『家の光ニュース』で、記事活用グループの活動や交流会の様態を紹介し、結成・登録を呼びかけた。今年度は、登録グループの活動分野を調査し、グループの活動内容を本会発行媒体に掲載しやすい体制づくりに取り組んだ。その一環として、布ぞうり作りに取り組む9グループにご協力いただき、全国家の光大会で布ぞうりの展示を行った。登録グループには交流誌「楽しい予感」を2回配布、交流会開催も呼びかけた。223JAで2,947グループが登録し、グループの交流会は8JAで実施された。

(4)「ライフプラン&家計簿」学習・実践運動

地区別JA生活文化活動担当者研究集会のカリキュラムに「ライフプランの理論と手法」を取り入れ、ライフプランの重要性を多くのJA担当者にすすめた。今年度は「21世紀ライフデッサン研究会」を設置し、専門委員・JA全国女性協を含めたメンバーで、これまでの運動の方策を検証、JAの総合機能を生かす方向性の検討をすすめた。その結果は次年度に反映させていく。

「家の光ニュース」では、短期集中連載(10~1月号)として学習・実践運動の提案をすすめるとともに、セミナー開催促進資材、講習会資材、指導者用PC資材を作成し、全都道府県およびJAでの「ライフプラン&家計簿」セミナーの開催を促進した。都道府県は20府県29会場、JAでは68JA124会場でセミナーを開催した。パソコン版「家の光家計簿」のダウンロードサービスも実施。また、JA全国女性協と協力し、「農家の家計実態調査」「ライフプラン&家の光家計簿」体験文の募集を実施した。

(5) 読書学習活動・ふれあい活動

読書学習活動を活発に展開するための活用資材を作成して、持ち寄り読書・読み聞かせ・読書ボランティアの実践を促進した。また、読書ボランティアグループの育成をすすめる2JAには、専門講師の派遣等の支援をした。

レクリエーション活動の一つとして、読者から「家の光音頭」の歌詞を募集したところ203編の応募があり、審査の結果「お日さま音頭」が入選しCDを制作した。JAさいたまの女性部の協力で、全国家の光大会で踊りを披露した。

(6) 次世代対策支援

「JAちゃぐりんフェスタ」「都道府県ちゃぐりんフェスタ」の開催促進

「ちゃぐりんフェスタ」については、昨年度に比べ、JAでは38増の263会場、17,877名参加。県域では、岩手県、富山県、島根県、大分県、宮崎県、沖縄県の6県、1,630名が参加した。加えて『ちゃぐりん』1月号付録「惣一じいちゃんの食と農のかるた」の活用PRにより11会場のかるた大会の開催につながった。

「ちゃぐりんキッズクラブ」「あぐりスクール」の支援強化

「第2回 あぐりスクール全国サミット」を鳥取県JA鳥取中央管内にて5月に実施した。鳥取県の片山善博知事をはじめ、JAおよび中央会役職員や女性組織・青年組織、行政、教育関係者から約300名が参加し、活発な交流会を行った。「ちゃぐりんキッズクラブ(あぐりスクール)」は新たに8JAが開校し、現在60JAが登録し活動中である。

「子ども 食と農の教育活動」全国研究集会の開催

12月4日、JAの常勤役員、担当部課長、女性組織リーダーなど150名(58JA、28中央会ほか)が東京に集い、内閣府の報告や3JAの事例報告をふまえ、「JAらしい食と農の教育活動～JAファンを育み、地域に貢献するために」をテーマに共同研究を行った。

5. JA女性組織活動への支援

5月に開催されたJA全国女性組織協議会総会において「『家の光』学習・実践運動要領」「家の光三誌持ち寄り読書運動要領」「『ちゃぐりん』プレゼント運動実施要領」が決議され、関連するリーフレットの作成や、同運動を展開するための地区別リーダー研修会に講師・職員を派遣した。

また、9月のフレッシュミズ全国代表者会議の開催支援を行うとともに、「ライフプラン&家計簿」学習・実践運動を支援するために、各ブロック、県域の女性組織リーダー研修会やフレッシュミズ研修会などに職員を派遣し、開催に協力したほか、「JA女性大学開講マニュアル&事例集」を作成し、広域JAにおいて開設するJA女性大学等にたいし、カリキュラムや運営のノウハウを提供・支援した。

6. 公益性の高い事業活動の促進

(1) 次世代対策支援

「第1回食育推進全国大会」出展

6月大阪府で開催された「第1回食育推進全国大会」(主催・内閣府・大阪府)に、JA全中、JA厚生連、JA全国女性協と連携しながらの出展。『ちゃぐりん』『家の光』の紹介、食育関連図書の販売をはじめ、ちゃぐりんフェスタ、あぐりスクール、全国サミット開催などJAの「食と農の教育」活動を一般消費者、教育関係者等に紹介した。

「子どもファーム・ネット」の事務局機能の発揮

本年度から活動コンクールおよび全国交流会での文部科学省後援・文部科学大臣奨励賞授与の決定を得て、登録促進対策に力を入れた結果、登録グループ数は前年度対比157増の274グループ。未登録7県も解消した。1月27日には入選50グループと活動支援者250名を集めて「子どもファーム活動コンクール全国交流会」を開催し、農水・文科・全中から高い評価を受けた。

(2) 食と農の教育活動

『家の光オープンフォーラムin広島～浜美枝さんと語り合おう

～「食」のたいせつさ! 「農」のすばらしさ!～

3月17日、広島市内において、生産者と消費者という枠を取り払い、「食と農」に心を寄せる「生活者」が交流を図ることを目的として230名を集めて開催(JA広島中央会・共同主催、中国新聞社・後援)した。レギュラー

コーディネーターの浜美枝さんとゲストの枝元なほみさんのトークショーをはじめ、食農教育の実践報告、生産者の3分間スピーチ、地産地消のミニパーティーを実施した。

(3) 読書運動の促進

第61回「全国農村読書調査」を8月に実施した。調査地点は全国60地点。第4回「家の光読書フェスタ&読書ボランティア養成講座」を、8月に長野県茅野市、11月に愛知県豊橋市で開催した。第1回「家の光読書ボランティアスキルアップ講座」を1月に東京で開催した。第6回「家の光読書エッセイ」募集に、974編の応募があり、家の光読書エッセイ賞などの賞を授与した。

(4) 国際交流・親善の促進

第13回世界こども図画コンテスト入選作品展示会を、7月に千葉市、8月に鳥根県浜田市、富山市、宮崎市の以上全国4会場で開催した。また、第13回コンテスト国内上位入賞者3人を7月に海外交流の旅で韓国に招待した。第14回コンテスト作品募集では、68の国と地域から45,978点の応募があり、二次にわたる審査会で300点を入賞作品として選考した。3月には東京で国内受賞者、受賞者を出した在日の大使館員を招待、入賞者表彰式を実施した。

(5) 地域活性化への支援

農山漁村女性起業講座を11月に鹿児島市（実践編）、兵庫県三木市（実践編）、栃木県高根沢町（強化編）で実施した。

7. 事業・経営基盤強化

(1) 家の光ビジョン・3か年計画

「21世紀第1次家の光事業中期計画」ならびに「21世紀第2次家の光事業中期計画」に相当する6年間（平成13～18年度）の環境変化とこれまでの取り組み経過を整理したうえで、次期3か年でめざす姿を「家の光ビジョン」として明らかにし、「平成19～21年度家の光事業3か年計画」を策定した。

(2) 新規事業開発

インターネットの普及・定着で本格的なクロスメディア時代を迎えたが、本会も今年度からICT事業の研究・開発に着手し、制作部門におけるデジタル化のための研修会実施、JA中央会ならびに単位JAへの情報のインターネット配信体制整備等に取り組んだ。また、団塊世代を主な読者対象とした新園芸雑誌、季刊『花ぐらし』を平成19年3月16日に創刊し、あわせて同誌と連動したウェブサイト「Web花ぐらし」を開設した。

(3) 公益法人制度改革への対応

平成20年からの「公益法人制度改革」の実施諸策等について、会内に「公益法人制度改革への対応プロジェクト」を立ち上げ、情報の収集・分析を行った。

上半期監事監査内容について、これまで会計監査と業務監査を行ってきたが、公益法人の上半期決算が義務付けられていないこと、平成18年7月の金融庁監査法人業務改善命令により、監査法人は上半期の会計監査に対して意見表明をできなくなったことから、上半期監事監査は業務監査のみとし、また上半期決算も行わないこととした。

(4) 家の光事業に関する基礎調査研究の実施

次期3か年計画に基づく事業展開に向けて、会内に「家の光事業基礎調査研究プロジェクト」を設置し、農家・農村・JA、出版界・読書運動等の現状に関する資料・データを収集・分析するとともに、編集企画や普及運動に反映させるため『家の光』『地上』『ちゃぐりん』の読者調査を実施した。また、第24回JA全国大会でJAの地域社会への貢献活動が決議されたことと本会の公益法人としての役割を踏まえ「JAの『地域社会への貢献活動』の課題と家の光事業の役割発揮に関する調査研究」を(社)農業開発研修センターに委託し報告書をまとめた。

(5) 県単一JA教育文化活動研究会の開催

12月6日、家の光会館においてJAならけん 島秀和常務理事ほか計8名が出席し、県単一JAにおける教育文化活動のすすめ方について相互研究をはかった。

(6) JA生活文化活動実践方策研究会の開催

12月19日、虎ノ門パストラルにおいて福井県立大学 北川太一助教授をコーディネーターに、JA新ふくしま 菅野孝志常務理事ほか計4名が出席

し、JAにおける生活文化活動の実践方策について研究した。

(7) 事業進捗管理と活力ある職場づくり

常勤役員・本部長・室長による「経営戦略会議」を定期的に開催し、「チャレンジ&クリア2か年プラン」にもとづいて、『家の光』をはじめとする各媒体の収支改善をはかるとともに、各管理職位者にも「チャレンジ&クリア2か年プラン」にもとづく損益管理、予算管理を徹底した。